

巻頭言

東魂西才

佐久間 貞行

最近宇宙論が活発になり面白くなってきた。「宇宙」の語源と定義は二千年前の「淮南子」にあるようである。「往古来今謂之宙、四方之上謂之宇」すなわち宇宙とは空間および時間、その中に含まれる一切のものを指す（哲学事典：平凡社）。そこには「全」の思想がある。現代の英知を集めた宇宙論の紆余曲折もこの中に在るように思われる。もっともこれも簡潔で優れた語彙の含蓄の故といえるかもしれないが、いずれにしても「時間と空間のあり方」、「全」については、医学においても常に考えておく必要があるだろう。

アインシュタインが自ら否定した宇宙項すなわち反重力が再び復活の気配を感じさせたり、星よりも宇宙が新しいことになりかねない、ビックバン、インフレーション、泡宇宙やニュートリノの質量など、天文学と素粒子論、最大と最小の極限の結合のもたらしたものは、何れにしても宇宙の実体は「常に変化している」であろう。宇宙で変わらない「もの」はない。近頃考古学も宇宙論に似て大変面白い。考古学によって歴史は書き換えられている。しかし宇宙の議論や記述された歴史が変遷しても、宇宙の実体や人類の過去の実態は変わらない。そこにわれわれの研究心を擲るものがある。

これらは人体にも当てはまる。医療の原点は健康の維持である。健康な身体に戻すと言うが、厳密には治療によって元の「からだ」に戻ることはない。「ゆらぎ」と「ずれ」がある。人体も宇宙の一部である。「常に変化している」。医学研究にも「全」を考える大胆な宇宙論的発想が必要であろう。

今臓器の移植術が進歩している。生体からの移植、死体からの移植、人工臓器の移植（摩耗は人体に比べれば激しいが、ヒトの死を期待しなくてもよいので望ましい方法）のほか、米国では生体外で幹細胞の培養増殖をして移植片を得ようとしているが、これは将来が期待できる優れた方法であろう。さらに我が国では京大再生研の清水教授が、生体内で自然治癒力によって再生しようと研究を進め成果を挙げている。その研究の奥にあるものは生体の「全」を考え

たものであり、教授は「人体のなかに宇宙をみる」と述べている。

二十一世紀を動かす「技術革新波」(シュンペンター)は何れにしても「DNA技術」と「情報関連技術」であろう。そしてその何れも米国がもっとも強力な技術力を保有している。これは特許の存在する限り米国によって覇権されていると言ってよいであろう。従ってこれに克つことは小技で優れたとしても至難の業である。これを克服するには、「発明・発見波」(西沢)に該当するような「全」の研究が必要であろう。日本の独創的哲学といわれる西田幾多郎の「善の研究」は「禅の研究」に拠るところが大きい。「全の研究」に一脈相通ずるところがある。科学に対する東洋的発想の必要性がしばしば説かれるが、それは追求するときの論理性の違いとともに宇宙観にたいする感性の違いの問題であるように思われる。

和魂洋才という言葉がある。要約すれば洋学の受容が始まった享保の改革から第二次大戦の終結時まで、日本人の人間形成を基本的に規定した発想で、和魂とは儒仏的教養とそれに混融した日本人の伝統的な精神を、洋才とは世界観的、人生観的要素を排除した技術学としての西洋の学芸一般を指すということになる(哲学辞典:平凡社)。佐久間象山の「東洋道德、西洋芸術」、橋本左内の「機械芸術取於彼、仁義忠孝存我」はこの志向を要約したものである。「和魂」は人生観に近く、東洋的宇宙観には遠い。宇宙観に拠った言葉として東魂、宇宙観も踏まえた洋才として西才とよび、東魂西才をもってこれからの研究のよすがとしたい。

(名古屋大学名誉教授)